# ナエウィウス「ポエニ戦争譚」について

楠　田　直　樹

## はじめに

現代社会における最近の湾岸戦争などの国際的な激変を目の当たりにするにつけ，こうした一つの出来事が，その後どのように社会の中に根づいていくのか，あるいはどのようにその解釈が変遷していくのか，といったことが多少とも関心を呼ぶところではないだろうか。

それは古代社会においても，同じことである。しかし，いかに解釈するのかは大いなる蓋然性を含蓄したものであることには注意しなければならない。「ポエニ戦争」という当時の地中海世界における東西衝突は，当時の人々に大きなテーマを投げかけたことは事実である。そして「カルタゴ」というテーマを追求していく場合，このローマとの間に勃発した三度にわたる「ポエニ戦争」を避けることはできない。逆にいえば、この「ポエニ戦争」を通して知りうる「カルタゴ」の実像もあるわけである。

近年とみに「カルタゴ」が俎上にのぼる機会が多くなったが，それはある面では現状日本のおかれた立場を「カルタゴ」にダブらせて，一種の危機意識を鼓舞する類いのものが多いからにほかならない[1)]。「カルタゴ」の歴史的な意義は果してそれだけなのか。あまりにも皮相的な捉え方のようで仕方のない部分があるような気もし，この20世紀末ではこのような意義，つまり表相的な意義に終始せざるをえないのかもしれないという思いもある。だが，「カルタゴ」の歴史の中にみられる『成住壊空』は我々現代人にそれ以上のものを語りかけ

てくれているような気がしてならない。

このような思いを抱きながら，本稿ではローマ人が「カルタゴ」をどのように見ていたのか，また「ポエニ戦争」をどのように感じとっていたのかを，ナエウィウスの「ポエニ戦争譚」を通して，その一端を垣間見れれば幸いである。

## 1．ナエウィウス研究の概観

ナエウィウスの「ポエニ戦争譚」は現在わかっているところで，七巻で，断片数は66であるが，その断片がそれぞれどの部分を示しているかによって，多少とも諸説があることも事実である。

その研究動向を認知するうえで，どのような研究が現実になされているのかを，ここ十年ほどを目途に網羅的にあげておきたい〔順不同〕。

D'Anna, G,. "Alcune considerazioni sull'archeologia neviana", Problemi di letteratura latina arcaica, Roma, 1976, pp.7-41.

Godel, R., "Virgile, Naevius et les Aborigènes", MH 35, 1978, pp.273-82.

Timpanaro, S., "Il servitore di se stesso. Nevio, com.26 R.$^{3}$ e altri passi di autori latini", Contributi di filologia e di storia della lingua latina, Roma, 1978, pp.115-6.

Villa, G., "Problemi dell'epos neviano; il passagio dall'archelogia mitica alla narrazione storica" RAIB 66, 1977/8, pp.119-52.

von Albrecht, M., "Naevius' Bellum Poenicum", Burck, E., ed., Das römische Epos, Darmstadt, 1979, pp.15-32.

Barchiesi, M., La Tarentilla rivisitata. Studi su Nevio comico, Pisa (Bibl. di Studi ant. XII), 1978.

Borghini, A., "Codice antropologico e narrazione letteraria. Il comportamento del soldato valoroso (Nevio, Bellum Poenicum fr.42 M.)", L&S 14, 1979, pp.165-76.

Pieri, M.P., "Una reminiscenza del Bellum Poenicum neviano Frontone?",

Studi di poesia latina in onore di Antonio Traglia, Roma, 1979, pp.11-23.

Schaaf, L., "Die Todesjahre des Naevius und des Plautus in der antiken Überlieferung", RhM 122, 1979, pp.24-33.

Safarewicz, J., "Remarques sur la langue des fragments épiques de Naevius", Meander 35, 1980, pp.15-25.

Traglia, A., "Problemi di letteratura latina arcaica, II: Gneo Nevio", C&S 19, 1980, No.75, pp.40-58.

Cavazza, A., Resta Barrile, A., ed., Lexicom Livianum et Naevianum Hildesheim, 1981.

Bettini, M., "Vel Vibe di Veio e il re Amulio. A proposito di Nevio praet. 5 sg. Ribb.$^{2}$ e di bell. poen. 12 Mor.", MD 6, 1981, pp.163-8.

Flores, E., "L'Anchise di Nevio e la fondazione di Lavinio", QS 9, 1983, No.18, pp.283-303.

Luck, G., "Naevius and Virgil", ICS 8, 1983, pp.267-75.

Molinelli, M., "Allitterazione e hapax legomena in Nevio. Nota a Com. 57 e 76 R.", AFLM 16, 1983, pp.513-20.

Flores, E., "La sibilla Cimmeria in Nevio", Cerri, G., ed., Scrivere e recitare. Modelli di trasmissione del testo poetico nell'antichitià e nel medioevo. Atti di una ricerca interdisciplinare svolta presso l'Istituto Universitario Orientale di Napoli, Roma, 1986, pp.127-41.

Geiger, J., "The Earliest Reference to Jews in Latin Literature", JSJ 15, 1984, pp.145-7.

Mariotti, S., "Concinnat in Naevio Bell. Pun. frg. 39,3 Morel", von Stache, U.J., Maaz, W. & Wagner, f., ed., Kontinuttät und Wandel. Lateninische Poesie von Naevius bis Baudelaire. Franco Munari zum 65. Geburtstag, Hildesheim, 1986, pp.1-5.

Traglia, A., ed., Poeti latini arcaici, vol.1: Livio Andronico, Gneo Nevio, Quinto Ennio, Torino, 1986.

Nóvoa, F., "Catón y Nevio", Argos 8, 1984 [1987], pp.67-74.

Bernardi Perini, G., "Sul fr. 32 Mor. del Bellum Poenicum di Nevio", Tandoi, V., ed., Disiecti membra poetae. Studi di poesia latina in frammenti, vol.3, Foggia, 1988, pp.3-11.

Flintoff, E., "Naevius and Roman Satire", Latomus 47, 1988, pp.593-603.

Mariotti, S., "I piaceri senili di Nevio e di Plauto", Filologia e forme letterarie. Studi offerti a Francesco dalla Corte, vol.2, Urbino, 1987, pp.21-6.

Scarsi, M., "Naev. B.P. fr.23 Mo.-Strz. in due lemmi di Nonnio", Studi noniani XII, Genova, 1987, pp.189-202.

Skutsch, O., "Naevius Bellum Punicum 36", LCM 13, 1988, p.79.

Morelli, G., "Naev. Bell. Poen. 18 Mariotti (26 Strz.)", Mnemosynum N.S.1, 1989, pp.445-50.

[関連研究]

D'Anna, G., "Didone e Anna in Varrone e in Virgilio", RAL 30, 1975, pp.3-34.

Conti, M., "Orazio e l'epos arcaico latino", RCCM 17, 1975, pp.293-302.

Puccini, G., "Elementi arcaici nel terzo libro dell'Eneide virgiliana", Orpheus N.S.1, 1980, pp.251-68.

Hofmann, W., "Die Volkstümlichkeit der Frühen römischen Komödie", Philologus 75, 1981, pp.228-35.

Annibaldis, G., "Ennio e la prima guerra punica", Klio 64, 1982, pp.407-12.

Eckstein, A.M., "The Perils of Poetry. The Roman 〈Poetic Tradition〉 on the Outbreak of the First Punic War", AJAH 5, 1980, pp.174-92.

Kessissoglu, A. I., Das elativische Adjektiv in der Frühlateinischen literatur, Europ, Hochschulschr. 15. Reihe XIX, Bern, 1982.

Gagliardi, D., "Sonipes in Lucano", CCC 4, 1983, pp.395-9.

Broccia, G., "De minimis curat grammaticus", AFLM 16, 1983, pp.483-504.

Oniga, R., "Il canticum di Sosia; forme stilistiche e modelli culturali", MD

14, 1985, pp.113-208.

Cugusi, P., "Una citazione neviana in Cicerone (Cic. Sest.97)", Athenaeum 65, 1987, pp.234-7.

Arena, R., "Divagazione su Luca bos", RFIC 116, 1988, pp.185-97.

Cristóbal, V., "Tempestades épicas", CIF 14, 1988. pp.125-48.

White, P., "Horace, Epistles 2.1.50-54", TAPhA 117, 1987, pp.227-34.

という具合に，雑多な感じで研究されているが，その中になにがしかの統一性を見るとすれば，やはり文献学的な考察ではないだろうか。

とすれば，そこにはナエウィウス自身の捉えた「ポエニ戦争」の再構成はほとんどなされていないし，その困難さが横たわっていることを示唆しているにほかならない。文法学的な研究もさることながら，その「ポエニ戦争譚」の中にある事実をいかにして具現化していくのか，これが大きな論点にならなければ，歴史的な視点からの追究は意味をなさないであろう。

## 2．ナエウィウス，その人となりと作品群

彼自身の墓碑銘に関しては，Gell. 1.24.2 に，

Inmortales mortales si foret fas flere,
Flerent divae Camenae Naevium poetam.
Itaque postquam est Orcho traditus thesauro,
Obliti sunt Romae loquier lingua Latina.

とあるように，カンパーニア出自のイタリキの人物であることには間違いなさそうである。さらに同じ Gel. 17.21.45 によると，"eodemque anno Cn. Naevius poeta fabulas apud populum dedit, quem M. Varro in libro De poetis primo stipendia fecisse ait bello Poenico primo, idque Naevium dicere in eo carmine quod de eodem bello scripsit." とあり，前235年の段階，つまり45歳くらいと推察されるその段階では，すでに演劇活動に入っており，ウァローからの聞き及びで，ナエウィウスが第一ポエニ戦争に従軍していたことに触れ，そ

の経験から詩歌の創作にまで及んでいたことを言及している[2]が，彼の演劇活動は俳優としてスタートしたものであると考えるのが妥当であろう。そして，Cic. Brut. 60 から，前204年頃にはナエウィウスの作品はラテン語修得に必要不可欠なものとなっていたことを示唆している。この頃ナエウィウスは没しているが，ヒエロニュムスによれば，前201年ウティカで没したと言及している[3]。彼は没するまで，名門メテルス家との確執を取り沙汰され，監禁追放されたとの言及がみられるように，不遇の晩年を送ったようにも思えるが，自らの意志を貫き通したともいえるのではあるまいか。

このような生涯の中で，彼の作品は，悲劇でわずかに 6 作品，喜劇で28作品がそれぞれその題名が知られているが，その断片は非常に乏しいといわざるをえない。「ポエニ戦争譚」を除いて，それぞれの題名を列挙すれば，

［喜劇］ Acontizomenos
Agitatoria
Agrypnuntes
Appella
Ariolus
Carbonaria
Clamidaria
Colax
Corollaria
Dementes
Demetrius
Dolus
Figulus
Glaucoma
Gymnasticus
Lampadio
Leon Nautae
Pellex
Personata
Proiectus
Quadrigemini
Stalagmus
Stigmatias
Tarentilla
Technicus
Testicularia
Triphallus
Tunicularia
その他題名不詳の断片

［悲劇］ Andromacha
Danae

Equos Troianus
Hector Proficiscens
Hesiona
Iphigenia
Lycurgus

［ローマ国民演劇］ Clastidium
Romulus sive Lupus

［その他不詳の断片］

という具合である。題名を見ての通り。喜劇そのものはギリシアのものをオリジナルとした作品であり，そのうち若干のものはローマあるいはイタリア起源のものをギリシア風にアレンジした作品であった。そして前222年頃新たな演劇様式，つまり fabula praetexta（ローマ国民演劇）を創設した。この前222年はマルクス・クラウディウス・マルスケスがクラスティディウムで勝利を収めた年であるが，ナエウィウスはその出来事を題材にした演劇で新風を送り込んだのだが，彼以降の後継者難のせいか，それはさほど人気を博することにはならなかった。しかし，彼自身は，いわゆるギリシア風喜劇でそれなりの評価を得ており，当時ではその地位は揺ぎのないものであった(4)。

その作品の中で，彼は大胆に当時存命している著名なローマの政治家を攻撃していた。そのうちの若干の攻撃的な作品は風刺演劇であったはずである(5)。例えば，スキピオ・アフリカヌスですら，彼の風刺演劇の餌食になっていた(6)。また,カエキリウス・メテルスの一族はナエウィウスに対してひどい嫌悪感をもっており，前206年にはクィントゥス・カエキリウス・メテルスは彼に対して報復的な脅しをかけていた(7)。風刺作家としての面目躍如たるところではないか。となれば，triunviri capitales によってローマで監禁投獄されたことも，望むと望まざるに拘らず，致仕方のなかった事実になってくるのではないだろうか。生命を賭しての風刺演劇であったことが伺い知れる。投獄中に “Ariolus” と “Leon” という二つの作品を書き上げ，その中で彼は自らの『過ち』を謝罪し，多くの人々を傷つけた自らの『癇癪』を謝罪した。そのせいか，護民官に

よって釈放されている[8]。

そうした彼の作品の中で，最も重要なものが「ポエニ戦争譚」である。彼が晩年になって書き上げた第一ポエニ戦争に関する叙事詩だといわれているもので，古サトゥルヌス韻律様式を駆使して述べられている[9]。ただ，この作品は最初のラテン語叙事詩ではないが，真のローマ的，国民的叙事詩だといえるものである。

ローマとカルタゴの英雄や神々の話から始め，その伝説的な起源を追って，ローマとトロイアとの幻想的ともいえる関係をその韻律の中に受け入れている。だから，その形式がのちのエンニウスやウェルギリウスの作品に多大な影響を与えたといえるかもしれないが[10]，それどころかこのような型式が一般的に広く流布していたといった方がよいかもしれない。その中には，第一ポエニ戦争に参戦した彼自らの体験が入っているはずであり，その視点が当然見え隠れしているはずである。しかしながら，いかんせん断片のみでそこから類推していくには己ら限度がある。

ともかく，キケローはナエウィウス自身が立派に振る舞っていたことを取り上げながら，エンニウスがその叙事詩を褒めたたえていることを認めている[11]。

## 3．「ポエニ戦争譚」断片の試訳

本論へと導いていくためには，どうしても粗訳であれ，残存断片を取り扱う必要がある。「ポエニ戦争譚」断片の試訳をここにあげておきたい[12]。

[第一巻]

1.　　汝ユピテルの九人の娘たち，心を同じくする姉妹たち

2－ 4. アンキセスが視界のうちに鳥を見たのち，
　　神聖な供物が家内神のもと食卓に一列に並べられた。
　　彼は美麗な金色の犠牲を捧げるのに忙殺されていた。

5－ 7. 両人の妻たちは

夜までにトロイアから，頭を布で覆い，出ていった。
二人は去りゆくまで涙で嘆き悲しんでいた。

8－10. 彼らの行く道に多くの人々が従った。
他の多くの人々はトロイアから英雄たちのもとに流れ，……
時を移さず戸外に出ると，金色で飾られていた。

11. 清潔で愛らしい衣服を身にまとい，金やミカン香料をふりまいて

12. 彼らは美しい大杯と金色の酒杯をもってきた。

13－15. そのとき老人が敬愛の念をもって強く慰留に努め，
諸神の最高神の兄弟ネプテュヌス，
海の支配神でもあるその神を召した。

16. 彼女はこうして全知全能の父神を訪ねる。

17. 神々の偉大な主神よ，なぜ汝は私を生ぜしめたのか。

18. ……木にとりつかれ，戦いに未熟な人々

19－20. 魅惑を込め，抜け目なく，彼は大まじめに尋ねた。
アエネイスがどのようにして都市トロイアを見放したのかを。

21－22. そして王アムリウスは空高く手を翳して，
神々に感謝した。

[第一巻か？]

44－46. そのうえにティタヌス人や二重身巨人，万能のアトラスが
どうであったのかを示す幻影が模倣されていた。
そしてルンクスもテラスの息子ポルポレウスも……

47. そして今では女神フォルトゥーナは彼の気持ちを静穏にしていった。

54. 彼は部下の将来をよくよく考えた。

[第一巻ないし第二巻]

23. 彼は神の定めの宣言をし，聖なる規則を宣した。

[第二巻]

24. まずケレスの子プロセルピナがやって来る。

25－26. それから子アポロン，有名な強弓ひきで，

デルフォイで神聖化された神。

[第三巻]

27. 神聖なものとなすべく，枝をかまえ，葉を聖なるものとした。

28. 同じときに，随行者たちは醜い生命を供与する必要があった。

29－30. コーンスルのマルクス・ウァレリウスは遠征軍の一部
率いている。

[第四巻]

31－32. ローマ人が平和な島マルタにやって来た。
彼らは放火と殺戮で荒廃させ，その所業を一掃した。

33. 勝利は交互にあちらこちらに転げている。

34－35. しかし，プラェトルがやって来て，吉兆を
もっていく。

36. 勝者たちに食肉を進物した。

[第五巻か？]

48. 厳しい飢えが敵にとって大きくなった。

49. 貨物の輸送船はまだ成り行き任せであった。

[第六巻]

37. 彼らが所領と共に王政を保つことが承認された。

38. 十七年もの間その地にとどまっている。

39. 堂々と冷笑的に彼は軍団を疲弊させた。

40. 彼はフェニキア人がこちらに会いにやって来ることを計算していた。

[第七巻]

41－43. フェニキア人との，彼らの義務が例えば，ルタティウスの要求に
合致するようになされた盟約であった。彼は自らの立場で
シチリア人が彼らの手で捕えていた捕虜の多くをあきらめねばならない
ような盟約を結んだ。

[巻不詳断片]

50. 全速力でウルキの炎を捕えたのであろう。

51－52. 青銅突起のある軍艦……荒れた時にも静かな時にも
海原の上をゆく。
53. 清らかな……河……よりも
55. 同じときに彼らは自らの中に，幾分はこの原因から，そして噂が流れた。
56. 大きな恐怖心の乱れは胸中の主人である。
57. ほとんど全てがある判断の下でもたらされている。
58. 彼らは万能で美しく，豊かな住居を濫用していた。
59－62. 彼らは同胞のもとへ不面目に帰還するよりもむしろ
そのときにそこで死に果てることを臨もう。
しかし，もしその勇敢なつわものどもを見捨てるならば，
世界中の人々に面目丸潰れになろう。
63－64. というのも，野卑な人々はいずれにせよ
理解力がなく……
65－66. まもなく
うみざりがにはルカーニアの牛を産卵するであろう。

という断片が残存している。

この中で各巻の構成をどのように捉えているのかを概略示しておきたい。

［第一巻］ トロイアの陥落に始まり，アエネイスがイタリアに脱出し，そしてロムルスによるローマの建国まで神話的な叙述がなされているのではないか。

［第二巻］ 神々の行動か。

［第三巻］ 第一ポエニ戦争の開始から，恐らく前262年のアグリゲントゥムの占領までの叙述か。

［第四巻］ 前260年ミュラエ，前257年テュンダリス，前256年エクノムスのそれぞれの戦いと，アフリカでのレグルスの功績と運命か。

［第五巻］ 前250年のパノルムスの戦いの描写が中心か。さらには前250年のリ

リュバウエムの長期にわたった包囲戦の開始そして前249年のドレパヌムの戦いも。

[第六巻] 前248年のハミルカル・バルカのシチリア到着から第一ポエニ戦争末までの記述か。

[第七巻] ガイウス・ルタティウス・カトゥルスの戦争準備から始まり，前242年のアエガテス諸島の海戦，前241年の講和までか。

というふうな構成が一般的に考えられるはずである。そして神話的なエピソードと第一ポエニ戦争そのもののエピソードが渾然一体になりきっているところに，この叙事詩の特徴があるのだが，その構成の背景になっている戦争の記述そのものは事実ではないだろうか。ナエウィウス自身も参戦していたために，当然主観的なところはあるだろうが，出来事については，神話的な部分を別にして第一ポエニ戦争と合致するはずである。

## むすびにかえて

本稿ではとりあえず，今後のナエウィウス「ポエニ戦争譚」の展望を示すためだけのものになってしまったが，詳細については次回に譲りたい。ただ，この当時の文献についてはほとんど整理されていないのも事実であり，今後の研究の進展を待たなければならないのだが，文学的な作品をいかに捉えていくか，定説のあるものについては問題はないが，その価値を増やしたり，あるいは新たに補足したりの作業を地道に繰り返していくことがこれからの課題であろう。そうでなければ，作品そのものの価値も半減するばかりでなく，今後の歴史研究そのものも縮小される結果になってしまうのではないだろうか。

ともかく，一つの示唆として捉えて，今後の研究の精進を期したい。さらに，ナエウィウスの「ポエニ戦争譚」そのものについても，さらに詳細に今後取組み，いわゆるポエニ戦争再構成の取り掛かりになるように研究を続けていきたい。今回はその始まりということで，言い尽くせていないところは容赦いただきたい。

(1992.9.26脱稿)

(註)

1) 拙稿,「古代カルタゴの宗教・信仰に関する一考察(1)」, 東洋哲学研究所紀要第七号, 1991年, 241-2頁, 註1)を参照せよ。その後, 長谷川博隆,「カルタゴ人の世界」, 筑摩書房, 1991年が発刊されている。

2) Gell. 17.21.44.

3) Hieron. ad ann. 1816=201. Cf. Cic. Brut. 15. 60. キケローは古資料がナエウィウスの死を前204年に記録していることを示しながら, ウァローがこの年代に不信感を抱いており, 彼の死を後年に位置づけていることを指摘している。

4) Cf. Gell. 15. 24 ; Ter. Andr. prol. 15-9.

5) Fest. 340. 27-9.

6) Naev. ex. incert. fab. 1-3.

7) Pseudo-Ascon. ad Cic. ; Verr. 1. 10. 29. Cf. Robinson, L., Freedom of Speech in the Roman Republic, 1940.

8) Gell. 3. 3. 15. Cf. Plaut. Wil. Glor. 211-2.

9) Cic. de Senec. 14. 50.

10) Naev. B.P. 2-10, 13-5 ; Cic. Brut. 19. 75-6 ; Enn. Ann. 231-2.

11) Cic. Brut. 75 ; Caes. Bass. ap. G.L. 6. 255.

12) それぞれの断片の出典表をここに整理しておくと, 以下のようになる。

| 巻 | No. | 出典箇所 | 参考資料 |
|---|---|---|---|
| I | 1 | Caesius Bassus (Atil. Fortunt.), ap. G.L. 6. 265. 10. | Mar. Vict., ap. 6. 139. 29 ; Ter. Maur., ap. 400. 2514. |
| | 2 | Probus, ad Verg. Ecl. 6. 31 (p.336 Thilo). | |
| | 3 | | |
| | 4 | | |
| | 5 | Servius auctus, ad Aen. 3. 10. | |
| | 6 | | |
| | 7 | | |
| | 8 | Servius auctus, ad Aen. 2. 797. | |
| | 9 | | |
| | 10 | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 11 | Isidorus, Orig. 19. 22. 20. | Macrob. S. 3.19.5; Hom. Od. 5.264; 6. 26; Il. 22. 154. Cf. Virg. Aen. 2. 763ff.. |
| | 12 | Marius Victorinus, ap.G.L. 6.139.7. | Caes. Bass. (?) ap. G.L. 6. 266.1. |
| | 13 | Priscianus, ap. G. L. 2. 351. 25. | Serv. auct. ad. Aen. 1. 198; Hom. Od. 12. 208; Macrob. S. 6. 2. 31. cf. Virg. Aen. 3. 525ff.. |
| | 14 | | |
| | 15 | | |
| | 16 | Varro, L.L. 7. 51. | Virg. Aen. 1. 229ff.. |
| | 17 | Festus, 340. 25 (p.306 L). | Lactantius, Div. Instit. 1. 6. 7; Serv. auct. ad Aen. 9. 712 (715) |
| | 18 | Macrobius, S. 6. 5. 9. | |
| | 19 | Nonius, 474. 5. | Non. 335. 3; Serv. auct. ad Aen. 1. 273. |
| | 20 | | |
| | 21 | Nonius, 116. 31. | |
| | 22 | | |
| I ? | 44 | Priscianus, ap. G.L. 2. 198. 6. | Prisc. ap. G.L. 217. 12. |
| | 45 | | |
| | 46 | | |
| | 47 | Priscianus, ap. G.L. 2. 242. 20. | |
| | 54 | Priscianus, ap. G.L. 2. 198. 6. | |
| I/II | 23 | Nonius, 197. 12. | Mr. Quaest. Naev. 26. |
| II | 24 | Priscianus, ap. G.L. 2. 231. 13. | |
| | 25 | Macrobius, S. 6. 5. 8. | |
| | 26 | | |
| III | 27 | Paulus, ex Fest. 469. 4. | |
| | 28 | Nonius, 76. 3. | |
| | 29 | Charisius, ap. G.L. 1. 128. 17. | |
| | 30 | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| Ⅳ | 31 | Nonius, 90. 24. | |
| | 32 | | |
| | 33 | Nonius, 183. 16. | |
| | 34 | Nonius, 468. 20. | |
| | 35 | | |
| | 36 | Nonius, 97. 13. | |
| Ⅴ ? | 48 | Priscianus, ap. G.L. 2. 152. 17. | Prisc.ap. G.L. 230. 3. |
| | 49 | Isdorus, de Nat. Rer. 44. | Paul. ex Fest. 62. 31. |
| Ⅵ | 37 | Nonius, 211. 1. | |
| | 38 | Nonius, 325. 6. | |
| | 39 | Nonius, 515. 8. | Non. 516. 2. |
| | 40 | Nonius, 267. 17. | |
| Ⅶ | 41 | Nonius, 474. 17. | |
| | 42 | | |
| | 43 | | |
| ? | 50 | Festus, 532. 4. | |
| | 51 | Varro, L.L. 7. 22. | |
| | 52 | | |
| | 53 | Festus, 414. 15. | |
| | 55 | Paulus, ex Fest. 369. 4. | |
| | 56 | Nonius, 214. 7. | |
| | 57 | Donatus, ad Ter. Andr. 1. 1. 28. | |
| | 58 | Priscianus, ap. G.L. 2. 235. 20. | Gloss, Vat. ap. Mai, Auct. Class. 8. 165. |
| | 59 | Festus, 460. 21. | |
| | 60 | | |
| | 61 | | |
| | 62 | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 63 | Festus, 472. 24. | Paul. 473. 8 ; Varro, L.L. 7. 108. |
| 64 | | |
| 65 | Varro, L.L. 7. 39. | |
| 66 | | |